

論文要旨

本論文は、日中両語における植物に関するメタファー表現、慣用表現を研究対象にし、認知言語学の視点から日中両語における植物に関する各々の表現についての探求を目的としたものである。全体は9章からなる。

第1章の序論では、まず、「認知」と「言語学」の関わりを各研究文献に基づき整理し、本論文の研究目的を記す。さらに本論文の研究対象・考察方法、本論文の構成、及び本論文における期待される研究結果を述べる。

第2章では、本論文の全体を支える理論的背景について述べる。最初に、認知言語学の誕生、及びこれまでの認知言語学に関する研究の流れを顧みる。次に、各研究者の見解のもとに、「認知と言語の関係」をさらに掘り下げる。また、本論文に関連する諸キーワードである「レトリック」、「メタファー」、「比喩」、「コーパス」、「命名論」などの定義づけや先行研究を集めて整理する。

第3章では、靛山(2006a)で提言されている現代日本語における植物を通して人間を見るという四つの見方に基づき、現代中国語の植物の生長過程としての人間に関する様々な表現を考察する。植物の生長過程に関する言語表現が人間及び人間の様々な営みに使われていることは現代中国語においても現代日本語と共通しているが、それに加え、日中両語の間には些細な差が存在することを指摘する。この第3章では、植物の生長過程の一部である「種」/〈种子〉、「開花」/〈开花〉に関する考察を行う。「種」に対する捉え方について、小さい種が、人間の脳の中で、物事の発端(原因)を表すことは普通であるが、中国語の場合、現実的に能力のある人をも表現できる。なお、「開花」/〈开花〉の概念レベルの意味合いについて、日本語では「プラスの描写」のみを持つが、中国語の場合、「プラスの描写」を持つのみならず、「マイナスの描写」もあり得る。このような中国語における〈种子〉または〈开花〉の意味的な生産性は日本語より高いことを第3章で確認する。

第4章では、人間(または人間の営み)を表わす植物に関する四字熟語に注目し、それらの会話談話での実際の応用状況を検討する。日本語の場合、「連句」、「和歌」などにおける談話のレトリック研究がある。漢語においての特有の言語現象の一種である四字熟語については、表現上は短くて濃縮されているが、意味上は長い文に負けないほど高度な表現手段となり、覚えやすく人々に様々なイメージを与える。この第4章では、植物に関する四字熟語を考察対象にし、中国語における植物四字熟語が会話談話におかれる場合

の使用状況を論じる。中国語の場合、植物に関する四字熟語は概念メタファー《人間は植物》の表現例として成り立つことが可能であるが、会話談話のコンテキストによって、ほとんど使われていない場合も少なくないことが判明した。また、四字熟語ごとの応用頻度がそれぞれである点も明らかにする。

第5章では、レトリックにおける比喩性を中心に、日中両国のことわざを分析する。まず、武田(1992)の論述をめぐって、これまでの先行研究に基づき(特に山梨(1988))、植物の生長段階に関することわざに対する比喩の分析を三つのフレーム(「ことわざの表現形式」、「ことわざの構成要素」、「ことわざの全体表示と文脈」)から行う。武田(1992)では、隠喩を持つことわざは多くないと指摘されているが、この論述は妥当性が欠けている。この第5章における分析の結果、いずれのフレームでも隠喩型ことわざは比較的によく存在していることが判明した。なお、このフレームにしたがい、中国語における植物の生長段階に関することわざの例についても取り上げる。「ことわざの表現形式」から見る場合、日本語では典型的な隠喩を用いることわざが存在するのに対して、中国語の場合、典型的な隠喩のみならず、直喩型のことわざも見られる。また、「ことわざの構成要素」から見る場合、日本語では、換喩と隠喩を用いることわざが見られる一方、中国語では、隠喩を有することわざしか見られない。さらに、「ことわざの全体表示と文脈」のフレームでことわざの比喩を捉えると、中国語の用例の中、対句形式のようなことわざが存在し、その類のことわざにおいては、部分的には比喩表現が見られるが、全体表示においては比喩表現であるとは言えないと考えた。

本論文における第3章、第4章、第5章は、植物に関わる比喩について、日中両語の対照研究を行ったものである。第3章で扱ったのは、「種」や「花」というような一般語彙であり、基本は日常でよく見られる短い表現である。第4章は四字熟語、つまり、四文字からなる慣用表現、一方第5章はことわざという上記の二つの素材と比べ、比較的長い言語表現をそれぞれ扱った。一般語彙、四字熟語、ことわざ、これらはいずれも漢字の含まれる表現であり、かつ、植物属性と関わっている。また、日中両語においてともに使われている表現である。これまでの分析からわかるように、植物に関する語彙表現、四字熟語表現、ことわざ表現の中には、比喩性を有する表現がかなり存在している。

第6章では、日本語に関する概念メタファー表現《感情は植物》・《メンタルは植物》について検討した後、『筑波ウェブコーパス』(<http://corpus.tsukuba.ac.jp>)を利用して概念メタファー《メンタルは植物》に関する「まだら」問題を考察する。植物の部位で

ある「根＋（助詞）」と「形容詞」との組み合わせで、《メンタルは植物》を成すことが可能である一方、パターンによって、それらの度合いが異なっている。また、本章での調査データによれば、「根＋（助詞）」＋「普通の形容詞」（感情や性格を表す形容詞ではないパターン）の組み合わせからなる《メンタルは植物》の表現の中で容認度の高いものも少なくない。概念メタファー《メンタルは植物》に対し、「感情や性格を表す形容詞」はメンタルを表すのに必ずしも有利だとは言えないという点についてもこの章では述べる。

第7章では、日本語を学んでいる中国語母語話者を調査対象とする。具体的には、中国人若年層日本語教師を対象に、日本語メタファー表現（日本語における植物に関する概念メタファー表現）に対する解釈（理解）のアンケート調査を行い、中国人若年層日本語教師のメタフォリカル・コンピテンス及びメタファー表現理解に影響を及ぼす原因を考察する。結果として、今回の調査は中国の広範囲でのメタファー学習現状の一つの反映であることを指摘する。調査データによれば、中国人若年層日本語教師のメタフォリカル・コンピテンスはそれほど高くない現状（平均正解率 32.21%）であることが分かる。また、この章では、具体例を通して、中国人日本語学習者（被験者）によるメタファー解釈のずれについて述べる。それに加え、第二言語教育・習得に関する注意点及び異文化間コミュニケーションに対する民族性・民族的アイデンティティにも触れる。以上に基づき、日本語学習者にとって、意識的に語に対する文化的背景知識を拡張すること、民族的アイデンティティに注目することが重要であることを指摘する。

本論文の第8章では、命名に関する各理論を援用し、中国語における茶飲料名、化粧品名を対象に、命名の技法やそれに関するレトリック効果を明らかにする。

まず、8.1 節では、日中両国の先行研究を参考に、中国語における茶飲料の名称に関する考察を行う。8.1 で取り扱う茶飲料の名称はそれぞれ「ブランド名」、「シリーズ名」、「商品名」という三つの段階からなる。8.1 節では対応する段階での名称の「表示性」や「表現性」について検討する。そのなかで、「ブランド名」、「シリーズ名」は本来集団性を持つため、各名称に表示性の存在状況を確認する。一方、独自性を持つ「商品名」に関しては、「表示性」と「表現性」の両方からの分析を行う。最終的に、中国語茶飲料の名称においては、「表現性」を有する商品名より「表示性」を有する商品名のほうが多いことを指摘する。また、この節では、吉村（1995）、森（2020）で提示されている命名モデルをうけ、茶飲料における商品名を命名モデル理論と繋げてみる。代表例の有無、また

は代表例の割合について指摘する。

中国語茶飲料名の考察に続き、8.2 節では、日本系、欧米系化粧品（ブランド或いは具体的な品目）に対する中国語のあだ名をも分析する。化粧品に関するあだ名付けの動機づけは様々な面から見られる一方、化粧品は植物成分がベースで作られたにもかかわらず、ブランドの本来の名前も、ブランドをめぐるあだ名も植物の名称とあまり関係ないようである。本節で挙げる用例の中では、僅か2件の化粧品のあだ名が植物と繋がっていると見られる。それは化粧品ブランドである「LAMER」〈腊梅（ろう梅）〉及び化粧品品目の口紅である「Christian Louboutin」〈萝卜头（大根のヘッド）〉である。

また、8.2 節の考察で取り上げる化粧品のあだ名においては、「外観のデザインと色による命名」が最も多く占めていることを指摘する。これは藤原（2019）の述べる「外見上の特徴は見ればすぐ認知できるので、顕現特性として認知しやすく、ネーミングとしての焦点が当たりやすい」と合致していると言えるだろう。また、福留・松浦（2022）で言及されている「百科事典的知識」は命名に関与しているという点については、〈许三多（許三多）〉や〈杨树林（楊樹林）〉という化粧品のあだ名は中国のタレントに関する背景的な知識がなければ、確かになかなか想像し難いということが挙げられる。8.2 節の最後に、化粧品に対す中国語のあだ名について、「あだ名」の定義づけに相応することを述べる。同じものを指しているのに、対立したイメージスキーマこそ消費者により強いインパクトをもたらすということを指摘する。

第9章では、第1章から第8章までの議論をまとめたうえで、本論文の研究結果と今後の課題について述べる。